[別紙２]

審　査　の　結　果　の　要　旨

氏　名　　小　山　玉　野

本研究は、加齢による心身の機能低下や周囲の状況判断からケアの受け手としての本音を充分表明し難い高齢者の率直な気持ちを客観的に把握する手段として、社会学や心理学分野で用いられている Semantic Differential Technique（SD 法）が医療や介護の場面で有効であるか、老人病院入院患者に試用したもので、下記の結果を得ている。

1. 老人病院入院患者 94 名（男性 31 名、女性 63 名、年齢 50〜96 歳、平均 76.8 歳）に対する SD 法の適用は、心身の負担感はみられず、対応に理解の難渋や不能、困惑、拒否、放棄などはなく円滑に回答を得た。
2. 自分についてのイメージ（SI）と病院の生活についてのイメージ（HI）の 2 概念（コンセプト）を提示して 34 尺度で直感的回答をもとめ、点数化した尺度得点から因子分析した。累積因子寄与率 52.3％で 4 因子を析出し、第 1 因子を主体特性、第 2 因子を活動性、第 3 因子を機能性、第 4 因子を人間関係性と命名した。
3. 各因子に所属する尺度の得点平均から算出した SD 得点は、2 概念では SI より HI が高く、2 概念とも 4 因子の中で第 2 因子が最も低かった。HI において女性の SD 得点は全て男性より高く、ADL のよいものでは全因子で、77 歳未満群では第 1、3 因子で、77 歳以上群では第 1 因子で有意差があった。
4. 調査対象者らは老人病院という置かれた状況を悪く捉えてはいないが、活き活きとは感じていないと解釈出来た。また ADL のよい女性の HI における SD 得点が有意に高く、女性は入院生活をよいと思っているだけでなく、女性の入院生活への適応のよさが示唆された。これらの結果の解釈については量的、属性的後続調査による確認が必要であろう。

5. 調査対象者全員に Cornell Medical Index 調査と Visual Analogue Scale 調査を併行して用い、結果に SD 法との矛盾はみられなかった。また 9 名について SD 法調査を 2 回適用し、安定した結果を得た。

以上、本論文は医療や介護の場面での支援受給者である高齢者の本音の気持ちを心身の負担なく、客観的に把握する適切な手段が見当たらない中で、社会学や心理学分野でイメージ調査に用いられている SD 法の導入を試みたものである。SD 法の特性に基く方法論は身体的、精神的、社会的に負荷要因の多い高齢者の、直接的に表明し難い部分も含めた気持ちを容易に把握し得ること示し、提供される医療や介護の質の評価、表明され難い要因の探索、それらによる高齢者の医療福祉施策などの検討に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。